

会長挨拶

国大化学会会長 横山幸男（昭和49年電化卒）

先の総会において承認を受け、もう一期会長職を継続することとなりました昭和49年電気化学科卒業の横山です、どうぞよろしく申し上げます。4期目ということで会長もだいぶ長くなりますが、長いと言えば私が工学部に通い始めてから今に至る長さはその比ではありません。思い起こせば大学紛争華々しきころ、高校3年生の受験の年（1969年）に安田講堂事件が勃発し、東京大学と東京教育大学の入学試験が中止になってしまい（確か年末押し詰まってから決まったと思う）、そのあおりを受けて？浪人、昭和45年に工学部に入学しました。当時の横浜国大は学生運動の拠点校であって、弘明寺工学部の革マル派と清水ヶ丘経済学部の中核派が対峙し、互いのイデオロギーを主張し絶えず闘争が繰り返され死者まで出る有様でした（ほんのつい最近まで学内には立て看板があり殆ど学外の残党組がアジ演説をしていました）。入学して授業開始と思いきや、4年生の卒業が遅れていることを理由に5月末まで自宅待機を命ぜられたため、実質3年10ヶ月で卒業した珍しい学年でした。就職が決まっていた人はどうなったのか分かりませんが、自宅待機は本学に限ったことではなかったので、みんなで渡れば怖くない方式の今よりずっとおおらかで寛容な社会であったような気がします。その後、常盤台キャンパスへの全学部移転統合が進められ、1979年（昭和54年夏）に工学部最後の応用化学科と材料化学科（昭和52年に電気化学科を改称）が移転して統合が完了しました。中でも一番遅かったのが我が工業分析教室でした。かの名教自然碑は、弘明寺から常盤台の現存位置まで日通の大型トレーラーで運ばれました。他に弘明寺キャンパスの主であった何本かのヒマラヤスギやイチヨウの大木も移植されました。弘明寺本館に向かって左方の林にあった胡桃の木は、現在ローソン向かいの歩道にポツンと佇んでいます、誰にも気づかれませんが（右写真：上部は枯れていますが幹はかなり太くなりました）。常盤台にはもともと楠や桜



が自生し、平らな土地がほとんど無いのは旧保土ヶ谷ゴルフ場の名残でもあります。また、宮脇昭先生（植生学）のコンセプト（密植・混植によって樹木は成長とともに淘汰され自然に任せた森を形成する）に基づき多種多様な樹木苗が植えられ、以来40年以上経った今では全国的にも有数の緑に囲まれたキャンパスに変貌しており、オープンキャンパスでは迷子が出ることもあります。

常盤台に移転してからもなお、学生運動が下火になったとはいえ、正門には保土ヶ谷署の機動隊と装甲車が常駐し、夜の西門を出たところの暗がりには機動隊員が二人立っている、というようなことが10年以上も続いたでしょうか。

今年は昭和でいうと98年、気が付けばなんと半世紀以上の長きにわたり工学部・理工学部のお世話になってきました。2020年に理工系創立100周年を迎えましたが、その半分以上に関わらせていただいでい



胡桃の木

胡桃と化学棟2023年夏

ることには感謝するしかありません。長く居ればいいという訳ではありませんが、ここでは憚れるようなエピソードも含めていろいろなことが起こりました。そのうち究極の失敗は横浜市営地下鉄の誘致でしょうか。2019年11月に羽沢横浜国大駅が開業し、便利になったとか、宣伝効果が上がったなどと言われているようですが、市営地下鉄が横浜から新横浜へ延伸する際、三ツ沢上町から横浜国大(中央広場の真下に駅を建設)を経由して片倉町に向かう路線が計画されました。ところが、横浜市から打診を受けた本学は、こともあろうに当時の評議会が僅差で否決し断ったという、千載一遇のチャンスを逃した過去があります。当時の私のボスが評議員をしていてその悪しき結果を教えてくれたのであります。うわさに聞いて知っている人はいるかもしれませんが、直接知っている人は恐らくもう誰もいないでしょう。今の時代の大学選びはアクセスの善し悪し大きなファクターとして働きます。最近では名大や東北大などキャンパスの地下に駅は当たり前になってきていますが、当時は恐らく全国初、タラレバの話ではありますが、もし通っていれば理工学部で名称変更する必要もなく、全国有数の人気大学になっていたであろうことは疑う余地はありません。さて、話を戻して、今までに横浜国大でも一般入試が中止になったことがあり、それは東日本大震災が後期日程試験(毎年3月12日)の前日に起きた2011年のことです。3月11日14:46震度5強で化学棟は大揺れ、30分後に再び大揺れし、住人のほとんどが外の駐車場に避難して屋上の避雷針が大きく揺れるさまを呆然と見上げる様子は未だかつてない光景でした。化学棟は揺れの方向が幸いしたのか、私の研究室を含め建物被害はほとんどありませんでした。次の日に試験監督を命ぜられていたこともあり、交通機関や道路は寸断され帰宅するのも困難であったた

め、研究室で一夜を明かす覚悟で留まり当局の指示を待っていました。しかし決断が何と遅いことか、12日の試験中止が決定されたのは午前零時を回ってからと記憶しています。明け方4時過ぎに車で帰宅の途につきましたが、信号の働かない道路はある意味恐怖でした。その後、個別試験は延期ではなく中止となり、志願者のセンター試験の成績のみで合否判定がなされました。記憶に新しいところでは、新型コロナウイルス感染症対策のため2021年度入学個別試験が中止となっています。昔と違って今は学生選抜の多様化が進み、また代替できる大学入学共通テスト(2021年1月から)もあるので、個別試験が中止になっても受験生が大混乱に陥ることはないようです。

最近の明るい話題の一つ、日経新聞が毎年行っている「企業人事が評価する大学就職力ランキング」2024年版では、横浜国立大学は京都大学に次いで総合二位にランクされました。学生のイメージは「行動力」「対人力」「知力・学力」「創造性」の4つの側面から評価されているそうです。横浜国立大学は、「知力・学力」と「創造性」の評価が高くともに2位となり、企業からは「地頭がよく物事を多角的に捉えることができる」「既存プロセスの改善、定例業務の改善などに優れている」といったコメントが寄せられました、とのこと。本学の先生方の「教育力」が高評価を得ているということでしょうか。<https://career-edu.nikkeihr.co.jp/category01/value2024.html>

挨拶としては何か変な展開となりましたが、計らずとも長く身を置く結果となった者としては、このような裏の歴史を語っておくことも必要かと思った次第です。今後とも役員会一同どうぞよろしくお願いいたします。

副会長就任のご挨拶

国大化学会副会長 松本真哉（化学・生命系学科化学 EP 代表）

国大化学会の皆様、はじめまして。今年度から化学・生命系学科化学EP代表を担当することになりました松本真哉です。化学EP代表は、現職の教職員正会員を代表して、国大化学会の副会長を務めることになっています。会員の皆様のご支援やご協力を頂きながら、現職の教職員ならびに現役の学生の架け橋としての責任を全うできるよう精一杯努力致します。どうぞよろしくお願い致します。

令和に入りほぼ1年が過ぎる頃に、新型コロナウイルスの影響が世界中に拡がり、従来の活動が大きく制約を受ける状況になりました。大学の教育研究活動も大きな影響を受け、2020年度の初頭は、緊急事態宣言の発令もあり、教職員と学生が大学に来ることができない時期がありました。その後約3年が経過し、大学の教育研究活動も、コロナ禍以前の状況にほぼ戻っています。また学内外の関連活動も、今年度から対面形式で再開されるようになってきました。今年度の国大化学会の総会も、7月1日土曜日に本学で久しぶりの対面形式で開催されました。残念ながら今回は懇親会の実施はありませんでしたが、次年度には復活されることを期待しています。

この原稿では、本来は、副会長としての抱負などを書くことが通常かと思います。ただ、国大化学会の皆様には、新型コロナウイルスの影響が顕著になって以降も、様々な水準で学生などのご支援を頂いてきました。新たにご支援頂いた特別学生支援では、多くの学生が助けられたと聞いています。また、「学会参加補助」や「ドクタースタートアップ支援」などの支援も継続して頂いています。ようやく状況が落ち着きつつある今、いろいろな制約のある中で教職員と学生が共に歩んだ教育と研究の状況を振り返り共有できればと考えました。

2020年度は、最初の緊急事態宣言が発令されて以降、対面形式での教育や研究が困難になり、Zoomなどのオンラインツールを用いたライブ形式や、講義動画を視聴して受講するオンデマンド形式が、講義の軸になりました。多くの教員にとって、各ツールの利用が急務になると同時に、動画教材の内容や受講生向け課題の検討などで多くの時間が割られました。また学生実験も遠隔形式で進めることになりました。実験動画を準備すると同時に、対面形式と同



等程度の教育効果になることを念頭に課題などを設定しました。この時に整備した資料などが、対面が軸になった今でもいろいろな役割を果たしています。夏頃には、体育会の活動が徐々に再開され、一年生向けの実験も対面での実施を始めました。講義や学生実験の状況は、秋学期になっても大きく変わりませんでした。ゼミや研究室活動が制限付きで再開できることになりました。しかしその後も状況は変動し、2020年度は多くの活動が遠隔形式で進められました。2021年度になると、学生実験や学部専門科目は対面実施が軸になりました。今でも、大人数が受講する教養科目はオンデマンド形式が定番ですが、その他の活動はほぼコロナ禍以前の状況に戻っています。対面形式に戻った講義などでも、以前よりもオンデマンドで利用できる動画や教材などが充実する結果となり、学習意欲のある学生にとっては環境が良くなっているようです。一方、大学の調査では、2021年度以降、学生の学業に関わる時間の減少傾向が続いているという結果が報告されています。学びに前向きな姿勢を持たない学生にとっては、遠隔での活動を退避的な手段として選択している場合もありそうです。この点は、私たち教員のこれからの大きな課題の一つになると感じています。

今期から、いろいろな活動が復活することが予想されています。二年生向けの化学EP配属歓迎会も、今年度は以前と同じ形式で実施する予定です。国大化学会からも多大なご支援を頂けると聞いています。就職準備講座や先輩訪問なども、徐々に再開されることを期待しています。このような横や縦のつながりを体験できる機会が増えることで、学生の教育研究姿勢がコロナ禍以前よりも良い方向に向かうことを願っています。引き続き化学EPの学生と教職員へのご支援のほど、どうかよろしくお願い致します。